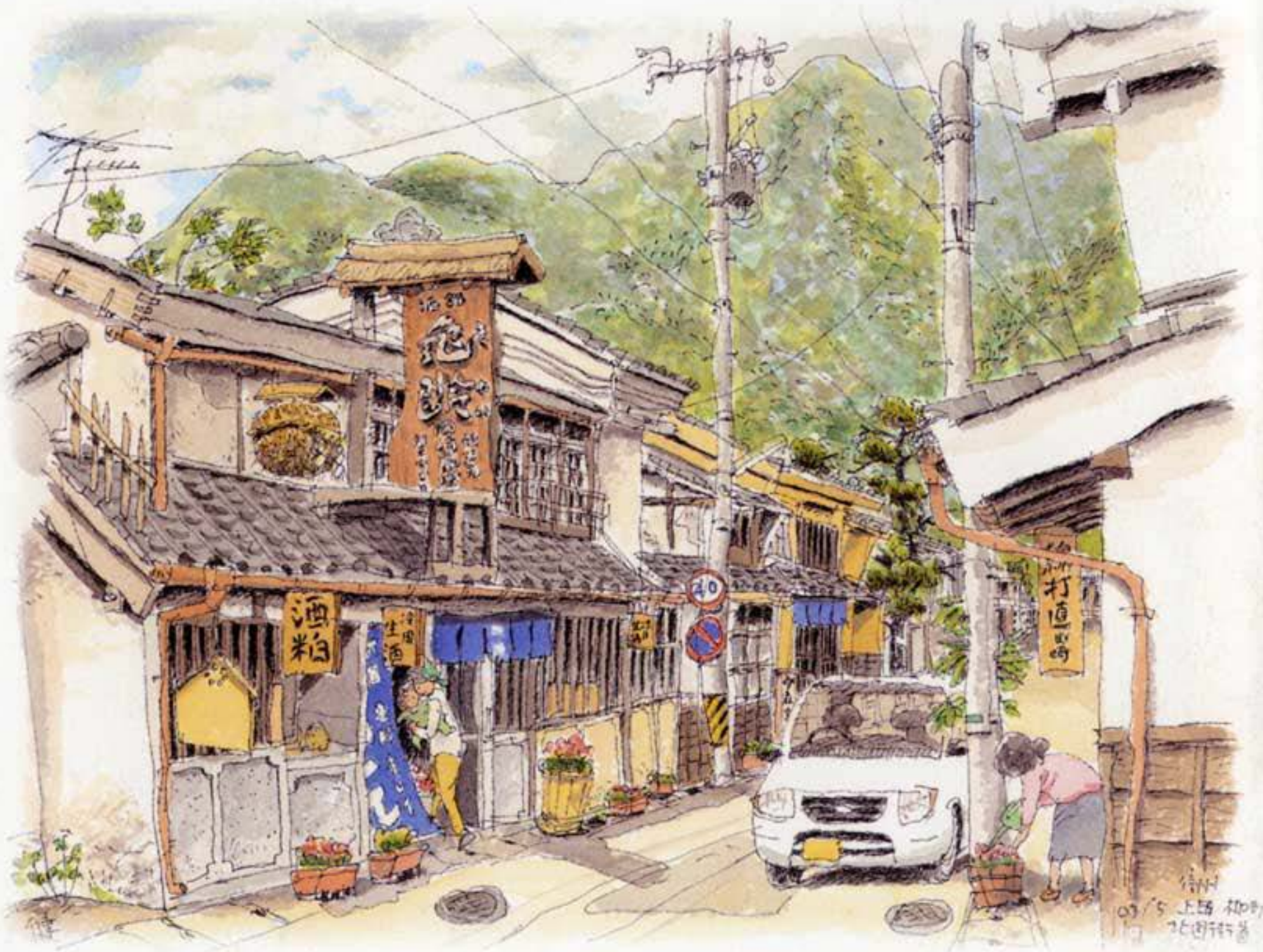


浄土

monthly
JŌDO

April 2005

4



法然上人鑽仰会



平成4年8月号



平成4年9・10月号



平成4年11月号



平成4年12月号



平成5年4月号



平成5年5・6月号



平成5年7月号



平成5年8月号



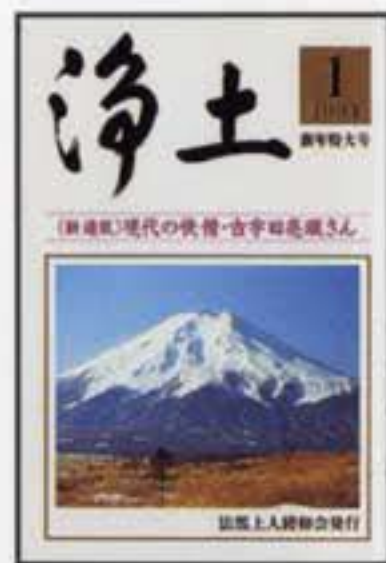
平成5年9月号



平成5年10月号



平成5年11・12月号



平成6年1月号



平成6年2月号



平成6年3月号



平成6年4月号



平成6年5月号

寺院紀行

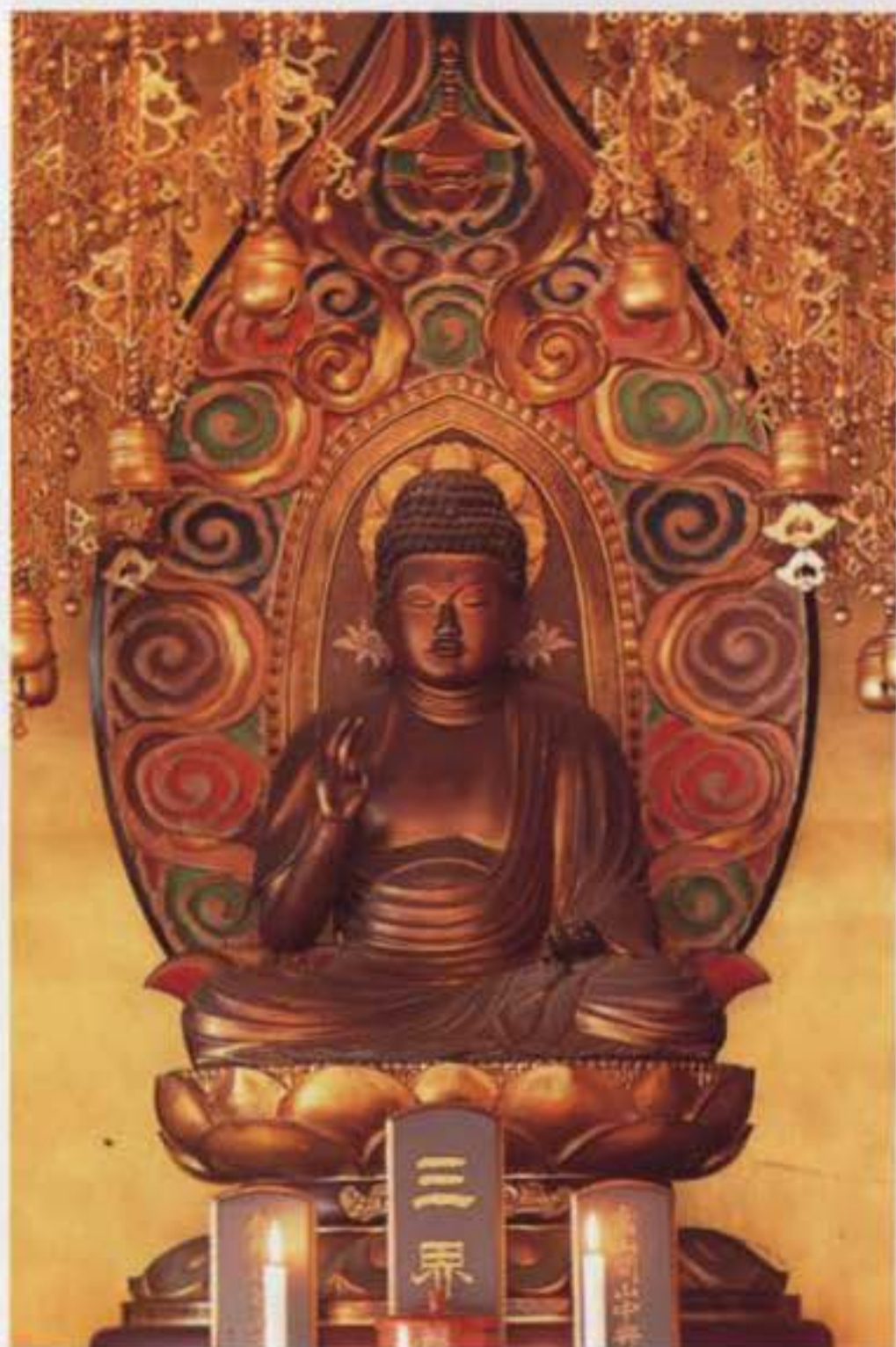
寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

東京・新宿

専念寺

専念寺は寛永五(一六二八)年、市ヶ谷本村に創建され、寛文十(一六七〇)年に現在地に移転した。写真下の本堂は昭和二十年の戦火で消失した本堂を布村哲哉住職が昭和三十五年に復興した新伽藍。客殿入り口を前に並ぶのは布村住職(左)と布村伸哉副住職





専念寺本尊、阿弥陀如来座像。太平洋戦争の昭和二十年四月十三日の空襲で専念寺は全焼、残ったのはこの本尊と過去帳だけだった。復興した本堂が建った頃はまだ周りに高い建物もなく、参道も今の道路の中央分離帯まで延びていた



一月二十五日、法然上人の命日に増上寺大殿で御忌の教書伝達式が執り行われた。増上寺法主成田有恒台下から教書を手渡される布村哲哉住職。また専念寺檀家総代、寺院の親戚なども列席されている



現住職から三代前に遡る真田孝全専念寺住職も大正十二年に増上寺の御忌唱導師を務められている。また、その時に稚児行列に並ばれた檀家さんの写真が残っている





いつも笑顔の布村哲哉専念寺第二十四世住職



参道脇の六地藏さまと観音さま。この
慈無量観世音菩薩は昭和十七年に檀家
さんが建立した像で、下が防空壕にな
っている小高い丘の上に建てられた。
そして専念寺本尊は空襲時にこの観音
さまの下の防空壕で難を逃れたという



専念寺墓地、奥に立ち並ぶのは新宿副都
心の高層ビル群。新宿はまさにお膝元



浄土

2005/4月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 東京・新宿 専念寺	写真=タカオカ邦彦	1
唯心の浄、土猫の浄土	玄侑宗久	6
寺院紀行 東京・新宿 専念寺	真山 剛	12
会いたい人 篠田正浩③	関 容子	20
連載 熊野古道を行く 第三回	森 清鑑	28
表紙のことば	村上 健	37
響流十方	袖山榮輝	38
日本酒のことば 日本酒のじかん	藤原理加	42
シネマ随想	袖山榮眞	44
Jフォーラム		47
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	48
マンガ「さっちゃんはネッ」.....	かまちよしろう	51
編集後記.....		52



表紙題字=浄土門主 中村康隆猥下
 アートディレクション=近藤十四郎
 協力=迦陵頻伽舎

唯心の浄土

猫の浄土

玄侑宗久

江戸時代の臨済宗僧侶、白隠はくいんぜんじ禪師という方は、じつに純粹で巨おおきな心の持ち主だったと思う。

ふつう、純粹というのは巨きな心とは両立しにくい。つまり純粹な人がある宗派に属し、まじめに励むと、ある種の狭量さに陥りやすい。それ以外は認めない、というふうになる人が多いと思う。

しかし白隠さんは、純粹でありながらもこうにも巨おおきい。むろん接せつ化の方便もあるのだろうが、とにかく「南無阿弥陀仏」も「南無妙法蓮華経」もOK、また弁天さんや大黒さん、稲荷さんの絵まで多くの信者さんに描き与えている。

この人にはこれが効くだろう、という観音さまめいた方便力があつたことも確かだが、どうも白隠さんは實際幅広くいろんなものを信じていたのではないだろうか。

幼い頃の天神さま信仰の影響などもあるのかもしれないが、こうした巨おおきさを身につけた一つのきっかけが、私は彼の「禪病」の体験ではないかと思う。

若いとき、白隠さんはあまりに集中的に禪修行に打ち込んだため、上半身が火照ほてり、動悸がして胸が締めつけられ、耳鳴りや幻覚にもずいぶん苦しんだらしい。それが「禪病」と表現されるのだが、これを彼は「軟酥なんその法」および「内観の秘法」で治したという。

いずれもある種の瞑想法だが、ここでは映像的イメージによる軟酥の法ではなく、言葉を使った「内観の秘法」のほうをご紹介したい。

なぜこんなことを書き出したのかというと、むろんそれが白隠さんの巨おおきさを作つたと思えるからだ、そこには「浄土」や「弥陀」という言葉が使われている。つまり、禪病を治すのに、白隠さんが阿弥陀さんや浄土の力を借りていることを、浄土宗の皆さんにご

報告したかったのである。

ちなみにこの体験は、白隠さん自身の筆によって『夜船看話』^{やせんかんわ}や『遠羅天釜』^{おらてがま}などに書かれる。それによれば、京都は白川あたりの白幽子という仙人に教わったというのだが、これはどう考えても怪しい。仙人といえは道教の達人だと思えるが、その言葉は、そういうものとは思えないのである。

ともあれ、唱えつつ心を集中していく文句を、次に紹介しよう。

- 一、わがこの気海丹田腰脚足心、まさにこれ、わが本来の面目、面目なんの鼻孔^{びくう}がある。
- 一、わがこの気海丹田、まさにこれ、わが本分の家郷^{かきよう}、家郷なんの消息がある。
- 一、わがこの気海丹田、まさにこれ、わが唯心の浄土、浄土なんの莊嚴^{しょうごん}がある。
- 一、わがこの気海丹田、まさにこれ己身^{こしん}の弥陀、弥陀なんの法をか説く。

いかがだろうか。

道教の考え方とも矛盾はしないだろうが、そうだとすでにそれは白隠さんの言葉に翻訳されているのではないだろうか。

私自身、道場での坐禅中にはよくこの言葉を無音で唱え、そのイメージを必死に描こうとしたものだった。

最初の「気海丹田腰脚足心」という言葉で意識を下腹部から足先まで巡らし、吸った息を下半身にゆっくり押し込んでいくつもりで深い呼吸を繰り返す。自分の求める本来の面目とは、その下腹部のように、目鼻口などの感覚に左右されるものではないと、自覚するのである。

次には自分の故郷を憶いだすのではなく、この下腹部にある「もわん」とした暖かみこそ、自分の命の故郷だと思う。そこからどういう便りがあるかと問うのだが、ただただこの「もわん」が広がっていくだけだ。

三番目にはいいよ「唯心の浄土」である。

下腹部の充実感はずから頭を清涼にしてくれる。その下腹部の充実に浄土を感じようというのだ。「浄土なんの荘厳かある」と唱えようと、なぜか日によってさまざまなイメージが現れる。しかしいずれにしても絢爛豪華でもないし、宝石に飾られてもいない。宇宙と自分が一体になったイメージが多かったと思う。

最後に「己身の弥陀」。宇宙と一体になった自分自身が、阿弥陀如来ではないかと観想するのである。その体からは当然に光を発し、優しい光で世界を包むのである。

初めからこんなイメージでしていたわけではないが、とにかく繰り返すこれらの言葉を唱えているとそんな感じになる。そうして、じつに安らかで大きな気分になるのだった。

己身の弥陀など、浄土宗の人々には抵抗があるかもしれない。

しかし阿弥陀如来はもともと実在の方ではない。いわば我々の内部から滲みでてきたイメージだろう。「アミターバ」という無量の光、あるいは「アミターユス」と云われる無量の命も、自分の内部からリアルに実感できなくてはならないと思うのである。

私は以前、臨死状況の人のなかに立ち現れる「アミターバ」のイメージを、小説「アミターバ」(新潮社)に描いた。それは臨死体験のなかで光を見るのが、かなり万国共通の現象だからである。万国共通ということは、人間という生き物の自然に、そんな光を見る

能力が元々具わっているということではないだろうか。おそらく浄土教を創始した人々は、臨死体験以外にもそんな体験をしているのだと思う。

白隠さんも、きっとそうなのだろう。自分の禅病を治しただけでなく、その後彼はこの内観の秘法を普及しようとする。白幽仙人に教わったというのが本当かどうかは判らないが、あれだけ言葉に拘った人がきっちり広めようとした言葉には、彼の確信が宿っているだろう。彼は「唯心の浄土」や「己身の弥陀」を何度も体験したのだと思う。

むろん、浄土宗の念仏行道や天台宗の三千仏礼拝など、各宗派ではこのアミターバに出逢うための行がきちんと用意されている。要はその行を通してどれだけ「アミターバ」をリアルに実感できるか、それこそが心の浄土を復権させる唯一の方法だと思う。

ところで坐禅は目を閉じないのだが、目を閉じることで得られる面白い体験もご紹介しておこう。

むろん坐禅が長時間に及ぶと、光に包まれるような体験もするのだが、そうではなく、ここで紹介するのはどなたでもできる簡便な方法である。まずはこれによって浄土の片鱗を感じていただき、願わくは「内観の秘法」や浄土宗の行によってその浄土を深めていただきたい。

まずは目を見開き、真っ白い紙をじっと凝視していただきたい。普通のコピー用紙でいいから、周囲がぼんやりしたり、点滅しているように感じるまで瞬きせずに見つめるのである。ふいに紙が見えなくなることもある。

次に目を閉じ、さっきの紙の残像を視界の中央にもってくる。残像は黒い。しかも動きまわったり消えたりまた現われたりするが、これをすっかり固定するのである。

固定された残像は、暗い視野のなかでひととき黒い漆黒であり、その周囲の輪郭線が、七色に光っているのがわかるだろう。

読むだけでなく、どうか実際に試してみたい。講演会などで皆さんにやっていただくと、九割くらいの方は体験できる。どういう加減で体験できない人がいるのかは定かじゃないが、体の脱力具合とか、無心であるかどうかなど、たぶんいろんな絡まりがあるのだろう。根気よくすれば、きっと誰でも漆黒の周囲の七色の虹を見ることができると、私は信じている。

簡単に云えば、私はこの七色の光の延長上にアミターバの無量の光があると思っているのである。

少なくともその状態は、非常に勘が鋭く、安らかなのに研ぎ澄まされている。自分がとても巨きな存在になった気がするのである。白隠さんも、おそらくこの光をいつも見ているのではないだろうか。

一説によると、この光が見えるのは人間の最も古い脳である脳幹部、つまり爬虫類型脳の機能ではないかと云う。だとすれば、それは爬虫類にも、それ以上の犬猫にも当然具わっていることになる。

そういえば先日境内に猫が一匹死んでおり、銀杏の木の下に埋葬してあげたのだが、寒い朝なのに猫は微笑むような死に顔をしていた。もしかすると、猫にも猫なりに、体験としての浄土があるのかもしれない。

げんゆう・そうきゅう

1956年、福島県三春町生まれ。安積高校卒業後、慶應義塾大学中国文学科卒。さまざまな仕事を経験した後、京都、天龍寺専門道場にて修業。現在臨済宗妙心寺派、福聚寺副住職。2001年「中陰の花」で芥川賞、その他「禅的生活」など著作多数。

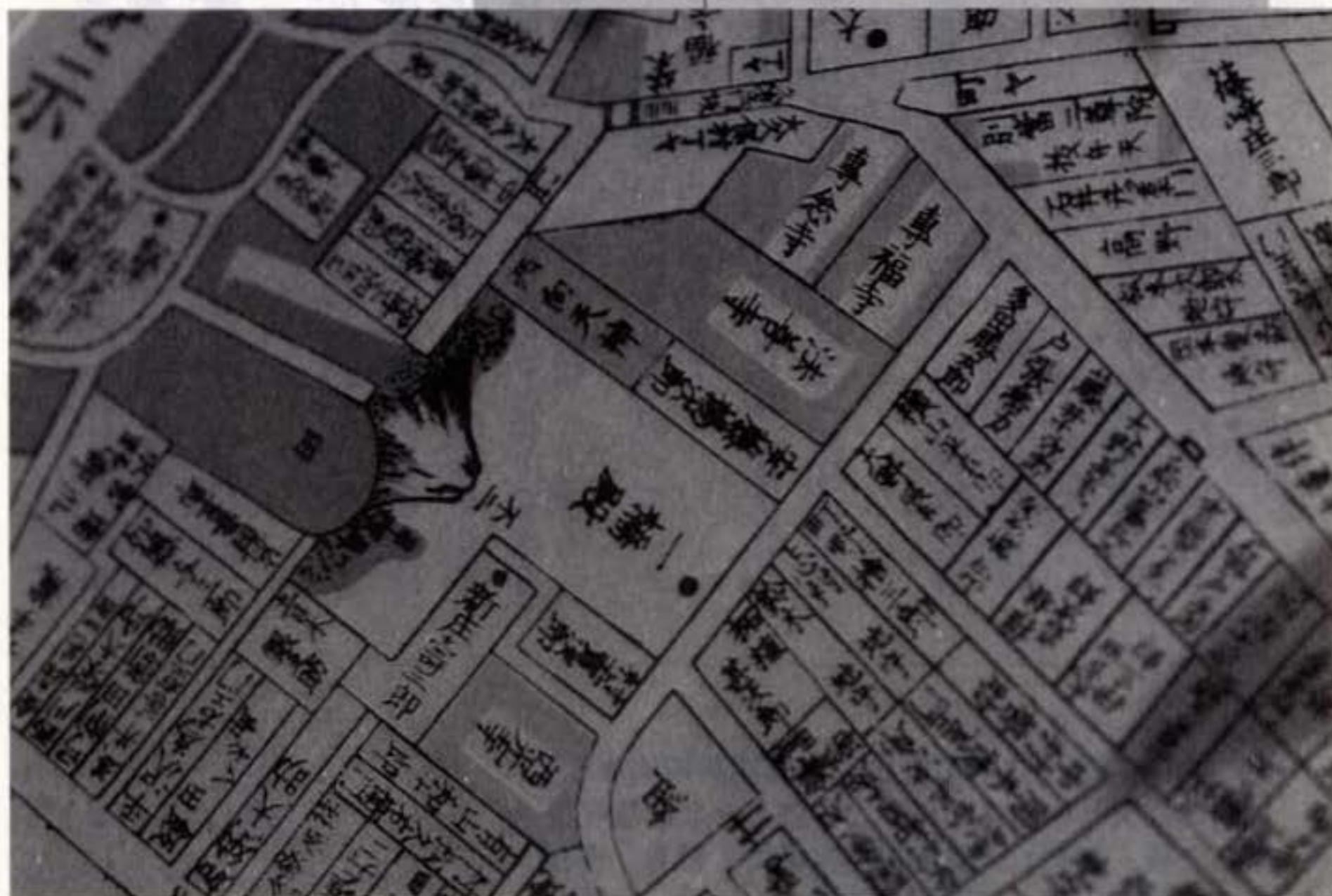
寺院紀行

東京・新宿

専念寺

撮影／タ力才力邦彦

文／真山剛



江戸時代後期の絵地図に書かれた専念寺、中央上。向かいにある抜井天厳島神社は源義家が苦難を乗り越えたことから抜け井天の名で親しまれる江戸六井天のひとつ

東京都新宿区東大久保、通称抜け弁天と呼ばれる旧街道入り口に専念寺の伽藍がたたずんでいる。佛願山正定院専念寺は新宿副都心が見渡せる小高い丘の端にあり、境内からは遠くに新宿の超高層ビル、手前には新宿と大久保の歓楽街が見渡せる。

専念寺の山道入り口の両脇にはワンルームマンションが十年前に建った。住人の多くは不夜城新宿の飲食店などに勤める人たちだ。

「夏休みには、子供たちが集まって境内でラジオ体操をしているのですが、体操の前後に、ここぞとばかりはしゃぎ回るんです。するとマンションから『うるさいぞ』と声がかかる。仕事を終え、寝付かれる頃なんです」と専念寺第二十四世布村哲哉住職。

専念寺の周りは歓楽街ではないが、このシーンはまさに都心のお寺ならではの一幕だ。

この専念寺名物のラジオ体操は今でも百名の子供が集まる。多い時は二百人を超え、さほど広くない境内に子供が溢れる。体操が終わると、住職の絵ばなしや、近所の方の手品や紙芝居と子供たちには楽しみが続く。今でこそ夏休みの十日間になったが、かつては夏休み中、四十日間毎日体操とこうした余興を続けていた。今では三代にわたって専念寺で体操をする家族もあるほどの、歴史あるラジオ体操になっている。

「子供が好きなのは若い頃からでした。大正大学では史学を学びな



客殿二階から境内と参道を臨む。本堂前のこの境内に今でも夏休みには百人を超える子供たちがラジオ体操に集まってくる

がら、児童研究会（以下児研）に入っていました。ちょうどその頃、この専念寺でお世話になった尼僧さんがいまして、近くの西光庵というお寺の住職でしたが。その方がお寺で保育園もやってらして、色々薫陶を受けたのが子供とかかわる始まりですかね」

この尼僧さんは近くにある尼僧寺、西光庵の北川教全前住職で、大本山増上寺の執事を務められ、昭和五十二年には御忌の唱導師も務められている。その北川住職から布村住職は若かりし頃に子供を育てる大切さから、お経の読み方まで教わったという。

そうした影響もあり、布村住職は大学で児研に入ったが、縁とは本当にいなものである。実は今回、増上寺の御忌の唱導師という大役を務められる布村住職だが、住職が勤める四月六日の翌日、七日に同じく唱導師を務めるのが、神奈川県座間市の宗仲寺の平野仁司住職で、布村住職とは大正大学の児研の同期、しかも平野住職が主任、布村住職が副主任という間柄だったのである。

「いやびつくりしました、偶然にしてもまさか平野さんと一緒に唱導師を務めるとは」。これに対して学年は同じだが、一歳年上の平野住職も「いや、驚きましたね、まさか布村くんと同じとは。先日、御忌の教書伝達式で一緒になり、旧交を暖め直しましたよ」と縁の深さに感じいていた。

そこで、平野住職に学生時代の布村住職のことを聞いてみた。



専念寺から歩いて五分にたらずむ浄土宗西光庵。徳川家と縁の深い尼僧寺で先代の北川住職から布村住職は薫陶を受け、また現在は閉園したが、この保育園での手伝いの経験が布村住職の子供への入り口になった

「いや、昔も今も変わりませんよ。彼には全く悪というものが無い。とにかく童心そのもので、今でもそれは変わらないですよ。あの笑顔を見ればわかるでしょう」

確かに人柄の良さは誰に聞いても共通した答えが返ってくる。ご本人もご自分を「こんな年して、こういうのも変ですが、今だに子供心がなくなるらない（笑）」と評される。

さて、もう少し平野住職に聞いてみた。

「学生時代で一番驚いたのは結婚だったね。とにかく彼は純情でまじめを絵に描いた男でしたから、児研の中では結婚が一番遅いだろうとみんな思ってた。それが一番早かった。都電荒川線で二人で座ってたたら、突然『結婚するよ』って聞かされて、あの時の衝撃は今も忘れない（笑）。

それと、未だに彼が絵ばなしをやっていることですよ。年は一つ僕の方が上だけど、彼だってもう六十九歳でしょう。いや、すごいね。学生時代から数えるともう五十年以上になるんじゃないかな。まあ、子供心がなくなるらないのは、こうした彼の人柄と積み重ね続けた努力があるからなんだろうね」

さて、布村住職が古希を目の前にしながらも子供たちとともに生き続けている原点は何なのだろう。それには少し布村住職と専念寺の昔に目を向けてみよう。布村住職の父であり、専念寺住職だった



御忌の教書伝達式では増上寺大殿の法然上人像の前で御忌唱導師が三人そろって三礼をする。中央が布村住職。その左側が平野仁司宗仲寺住職。布村住職と平野住職は大正大学児童研究会の同期だった

布村孝順師は富山県婦負郡（現富山市）の百姓家にひとり息子として生れた。やがて孝順青年は故郷を離れ上京、東京で大八車に積んだ富山の薬を売り歩き生計を立てていた。

ある時、そんな孝順青年に伯父であり専念寺の住職だった真田孝全師から声がかかり、専念寺に入ることになったのである。その後、孝全住職が遷化（僧侶が亡くなること）し、孝順師が専念寺住職に。そして昭和十五年には孝順師が孝全師と縁のあった同じ浄土宗の心法寺に移ったものの、昭和三十三年に哲哉師が専念寺の住職となるまで兼務住職として専念寺の面倒を見ていたのである。

ちなみに、孝順住職が移った心法寺は今も麴町にある寺院で、かつての江戸城外堀の内側にある城内寺院で、ほとんどの城内寺院が江戸城整備で移転した中、徳川家との深い縁もあり移転しなかった貴重な寺院である。現在は哲哉住職の弟の布村定雄師が住職を務めている。

さて、哲哉住職は大正大学を卒業するやいなや専念寺の住職になったのだが、すでに学生時代から専念寺には通っていた。専念寺は昭和二十年の空襲で全焼、本尊と過去帳を除いてすべてを失ってしまった。以来復興まで留守居のおばさんに住んでもらい、寺の仕事は近くの浄土宗の尼僧寺院、西光庵の北川住職にお手伝いしてもらっていたのである。



戦火を逃れた専念寺過去帳。近隣の寺院の住職の遷化日も書き込まれているなど、歴代住職のこころ配りが感じられる

ここで冒頭の布村住職の言葉へとつながるのだが、この西光庵の境内にある西光保育園で、布村住職は学生時代から園児と触れ合っていたのである。幼児の減少で西光保育園も五年前に閉園となったが、昭和三十年から平成十三年まで、欠かさず毎年お手伝いしてきたというのだから、本当に筋金入りの幼児教育者である。

また、布村住職は住職となった二年後には本堂を完成させ、その四年後には客殿と庫裏を竣工、さらに子供会、寺報の発行、専楽会という専念寺お掃除の会から始まった専念寺の檀信徒会を大いに発展させるなど、とにかくお寺に人が来てもらうために色々な事を実践した。そうした無理がたたって、昭和四十九年には腎臓を壊し約一年に及ぶ入院生活も経験している。

「それぞれの寺の持つ寺風とでもいうのでしょうか、それを大切に受け継ぐ住職。また寺風よりも自分の個性や想いを寺に吹き込む住職。この二通りがあるとすれば、私は前者です。専念寺という地元密着型の寺院が好きで、檀信徒と同じ目線で生きていけるのが私は好きなんです。そして、なぜか、いつもそこには子供たちがいるのですね」

とにかくどんな話をされても嫌みを全く感じない。こんな人柄の住職には初めてお会いさせていただいた。

こうした経緯で布村住職は専念寺の法灯を継いだのだが、住職歴

ははや四十七年になる。そしてこうしたキャリアからこの度の御忌唱導師という大役を仰せつかることになったのだが、ちなみに大正十二年に真田孝全専念寺第十九世住職も増上寺の御忌唱導師を務めていた。そしてまた、その時の稚児行列に出たという檀家さんが写真を持ってきてくれたという。これもまた縁というものだろう。ちなみに今回の御忌唱導師を務めるにあたって、布村住職がとても喜んでいることがあるという。それは、檀信徒のみなさんに法然上人や浄土宗のことについて詳しくかつ力を込めて話ができるようになったことだという。

「施餓鬼や十夜法要ではその行事の話が中心になり、法然上人や浄土宗について詳しく話せなかったのですが、この御忌をきっかけに檀信徒さんに念仏信仰をありがたさを喜んで伝えられるのです。まさに法然上人の念仏が時を超え広がっているということですよ」

さて、布村住職にはもう一つの顔がある。これはおそらく専念寺檀信徒さん知らない顔で、童話作家という顔である。

作家という表現が正しいか誤りかは、布村住職の作品集『ほとけさまの鈴』を読んでもらって判断に委ねるが、児童教化一筋で、何冊もの本を出版している布村住職の集大成ともいえる一冊である。また、これも驚くべき縁だが、なんとこの本のタイトルにもなっている「ほとけさまの鈴」という作品は昭和三十六年に、この『浄土』



掃除の行き届いた境内裏庭

に執筆した作品なのである。

布村住職が御忌唱導師を務めるにあたり、大正大学児研のOBでつくる鴨台童心会や布村住職が初代会長を務められていた浄土宗東京教区児童教化連盟のみなさんが、お手伝いをしてくれるという。今は顧問になられている布村住職から言い出したことではない。現会員が布村先生のためにと会をあげての応援を申し出たのである。そしてこうした児童教化関係の後輩たちが、御忌の祝宴で児童教化ならではの演出を考えているという。

「やっぱり童心への回帰でしょうか。どんなに時代や世相や環境が変化しても変わらないのは子供の笑顔です。その笑顔に清められているのは我々大人じゃないですか。一人ひとりの子供から与えられ、教えられているのですよ。」

その意味ではお寺は一人ひとりの人間の交りの場であり、仏さまとの縁の場であると感じます。私にとって子供は一人の人間であり、そして仏さまなのです」

こういう布村住職の目が子供のように光輝いた。

御忌唱導師として立派な衣に身を包む布村住職だが、その心はいつもと同じ童心のまま。そうした住職の務める法要や祝宴に法然上人も目を細められるに違いない。

(ルポライター)



布村住職は童話を書き続けてこられている。布村哲哉童話集と題された作品集

連載

田篠人

会いたい
関 容子

正浩
さん



③

撮影／タカオカ邦彦

『暗殺』の製作は昭和三十九年。大阪で万国博覧会が開かれた年で、京都の撮影所までの往きは夜行特急、帰りは新幹線、という時代だった。

「打上げをしようということで、会社（松竹）がぼくと岩下を赤坂のラテンコーナーという、のちに力道山が刺されたクラブへ招んでくれたんですよ。フィリピンのバンドが入ってて、マンボのリズムが流れていました。監督、踊りませんか？ って岩下が言うから、え？ これマンボだろ？ ルンバなら湘南ガールたちと踊ったことあるんですけどね。オレ、踊れないよ、って言ったたら、すぐ踊れるわよ、って言われてフロアーへ出て、何気なく相手をしてたら、そのうちにスローに曲が変わるとあたし、監督と結婚するかも知れないわね、って言われた。つまりぼくは突然暗示にかけられたんですよ（笑）。その十年後にぼくは岩下で『卑弥呼』を撮ることになるんですが、そのとき女優という巫女さんの

な存在の彼女が、直感でそう思ったんでしょ。うね。ぼくは不意を突かれて、え？ この人のことについてぼくは真剣に考えなきゃいけないのか……としばし茫然となりましたけどね」

篠田さんは、演劇に携わる人間、特に女優にはシャーマニズムがなければいけない、とつねづね考えている。

「新劇と言われたジャンルになかないいい女優が育たなかったのは、シャーマニスティックじゃなかったからです。杉村春子を例外として。だから新劇は衰退したんですよ。杉村さんは新派の女優みたいなのところがあって、女の業の深さがドーンと出てた。新派の初代水谷八重子さんにしてもそうで、森雅之さんから彼が新派に出たときの話を聞いたら、水谷さんが自分の役どころを演じて、あとのこは森さんが自由におやりなさい、って言われるんだけど、自分がどう逆立ちしてもその空間が埋められない。新劇ではまったくそう

いう体験をしたことがなかった。水谷さんてやっぱすごいよ、って言うてましたね」

森雅之は、理屈が先行する新劇をずっと演じてきて、新派や松竹新喜劇を含む商業演劇のたくましさや畏怖の念を抱いたのかも知れなかった。

でも、かなりの昔、私が里見弴さんから伺った話だと、初代水谷八重子も、ああいう知的で男くさい森さんみたいに魅力的な役者とは滅多に新派ではお目にかかれない、とよく言っていたそうだ。

「新派の男優はシャーマンに吸い取られてみんな抜けがらみたいになってましたからね（笑）。森さんが来たことはとてもありがたいことなのに、その値打ちのわからないお客ばっかりで、お互いにすれ違って、もったいないことをしたものですね」

森雅之は、篠田作品には『三味線とオートバイ』（昭和三十六年）に出演した。また、その翌年に『燃ゆる若者たち』には山田五十

鈴が出演している。

「山田さんもやっぱリシャーマン。女ってすごいもんだな、ってつくづく思いました。山村聡の高級官僚の妻で、芸者上りの役なんですけど、この人にも暗い過去の罪障を思わせるものがちゃんとある。その山田さんがあるときスツと寄ってきて、ニコツとして、篠田さん、あなた山中貞雄みたいよ、って言うんです。これ、すごい褒め言葉ですよ。われわれは山中さんの映画は観てますけど、もちろんお会いしたことはありません。戦争中に早逝なさった大監督ですから」

山中貞雄の代表作は『人情紙風船』『丹下左膳』を見た山田五十鈴はその俊才ぶりが篠田さんに通じるものを見たのだろう。

さて、話はそれだが、篠田さんは『暗殺』のあと、しばらく志麻さんに距離を置いていた。結婚にはすっかり臆病になっていたからだった。



「スパイソルゲ」の主役、イアン・グレンさんに演技指導する篠田監督。この俳優との出会いが本作品製作の大きな要素になったという

ある時期、映画を作る上での監督の考え方が、会社側の方針がだんだん折り合わなくなってきた、もうこの撮影所にはいられないかな、と漠然と考えていたころのこと。

「大船の撮影所で、夜の仕事も終って、建物からもれる薄明の中の満開の桜は何てきれいなんだろうと思って眺めていたら、チエホフの『桜の園』の幕切れで桜の木が伐られる音にふと思いが及んで、ぼくは松竹を離れても、岩下をこの大船から切り離すことはできないだろうなあ、とぼんやり考えてたんです。そしたら偶然岩下が、川端康成の『雪国』の駒

子の衣裳のまま、夕食を取るために桜の中に現われたんですよ。その印象の強さが私の脳裡に残り、後にぼくは松竹という廓を抜けるけど、あなたは残ったほうがいいと思う、と言ったら、いえ、私も出ます、ってキツパリ言うんです。そのあと彼女はロケのために湯沢へ行つて、そこから手紙と簾で編んだ鳩車の置き物なんかをぼくのアパートに送つてきて、もうなくなっちゃってますけど（笑）、度胸のいい女だな、と思いましたね」

結局篠田さんは押し切られて、志麻さんの両親の家に挨拶に行くことになる。

「親父さんは野々村潔と言つて、新協劇団で新劇運動をやつてた人です。ぼくが行くと裏から逃げちゃいましたけどね。お母さんは山岸美代子と言つて、久保栄の『火山灰地』で共演した野々村と結婚したんです。この初対面で、今度は篠田さんて久保栄にそっくりの人ね、つて言われました。氣質がどこか似てたんでしよう。映画監督としてやっていく姿

勢にオリジナリテイがある、とお母さんがふんでくれたんじゃないですか？ まあ承諾するも何も、ぼくは報告に行つただけですからね。このお母さんのお姉さんが前進座の河原崎長十郎と結婚した女優の河原崎しず江は岩下の実の伯母さんになるんです。前進座では日本舞踊は岩井流ですから、それを岩下も少女時代に習つてて、ですから彼女の日本的芸能の基礎は前進座でつけたものなんですよ。おまけに、ときどき鼻歌を歌うと『インターナショナル』だったりしてね（笑）、前進座共産党時代の名残です。ぼくは「インターナショナル」を『スパイ・ゾルゲ』のシーンに使いましたけど」

篠田さんと岩下志麻が結婚する、というニュースが世に報じられたときの反響はものすごかった。

「まず、あんな右翼に娘を渡すことはない、というのがありました。ぼくが石原慎太郎とかとよく一緒だったので、そう見られたんで

しよう。大映の永田雅一からは、岩下を連れてうちへ来てくれないか、と言われたりね。松竹は、結婚祝いとしてフリー第一作の『あかね雲』だけはうちで買い上げるけど、あとは知らないよ、岩下は早く篠田と別れてくれないかな、という感じ（笑）。『あかね雲』には野々村潔が刑事役で出て、岩下と父娘共演を果しましたけど、あとは役者をやめて、ぼくたちの表現社創設と同時に製作のほうの仕事を引き受けてくれて、とても助かってました」

結婚祝いにはもう一つ、珍しい品が篠田家にある。

それは前進座全員が寄せ書きをしてくれたアルバムで、そのすぐあとに中国共産党寄りの長十郎と、日本共産党の中村翫右衛門とが決別する分裂騒動があったので、この二人が名を連ねたサインにはとても稀少価値がある。

「岩下は、その両親とは違って唯物論者でもない。大船の桜の満開の下で再会して、この人はまだ夢の世界にいるんじゃないかなと思って、結婚して現実の生活が作り上げられるなんて想像もつかなかった。今まで結婚が続いてるのは、結局ずっと夢を見てて、それでそのまま過しちゃったのかも知れない。二人が向き合うのはいつも映画の場所だし、それ以外ではそれぞれ自分勝手な場所に沈黙してるしね。十歳年齢の開きがあるから、ぼくの考えてる世界に彼女は全然興味がないし、感性も違うし、結婚しても一緒に暮らしてる、という実感はないです。一人の女優と共同生活してる、というだけ。ぼくは規則正しい生活が好きだし、彼女は仕事がないときはできるだけ美容のために寝ていたいほうですから」

昭和四十二年の『あかね雲』の二年後に、表現社とATGの第一作『心中天網島』、その二年後に『沈黙』、三年後に『卑弥呼』、そ

の翌年に『桜の森の満開の下』と、いずれも岩下志麻主演の作品で大女優としての地位を不動のものにし、昭和五十三年『はなれ簪女おりん』、同六十一年『鎚の権三』ではベルリン国際映画祭で銀熊賞と数々の賞を受けた。

「結局自分のための映画をちゃんと作ってくれる監督を確保したわけだし（笑）、ぼくの映画で主演女優賞をいくつももらってますからね、あの人は。よかったんじゃないでしょうか。ぼくは岩下に対して何も強制はしないし、そうしないことが愛情の持ち方だと思ってる。ほかの監督の作品に出るときは脚本も見ませんよ。読めば監督として何か言いたくなるから、そっちの監督に悪い。それがわかるから本を見ないんです」

映画は監督のもの、演劇は演出家のもの、とよく言われるけれども、それは制作過程のことで、最終的には役者のものになるんじゃないでしょうか……。

「マキノ省三さんが言ってます。映画は、一に筋、二に筋、三に役者で、監督なんてどうでもいいんです（笑）。それほどいい脚本は大事で、次にそれを表現するのにふさわしい役者を見つけ出すことが監督の大仕事。配役が成功したらもう半分は完成したようなものですよ」

監督大団円の『スパイ・ゾルゲ』には、イアン・グレンという素晴らしい素材を見出して、この映画は大成功を納めた。

そして今、母校の早稲田大学教授として、後進の映像作家を育てる一方、歴史、古典芸能の研究に取り組み、近々『義経考』という論文も出るという。

篠田さんは人生の達人。その元になるものは、チャーミングな人柄と、みごとな演出の手腕だろう。

（おわり）

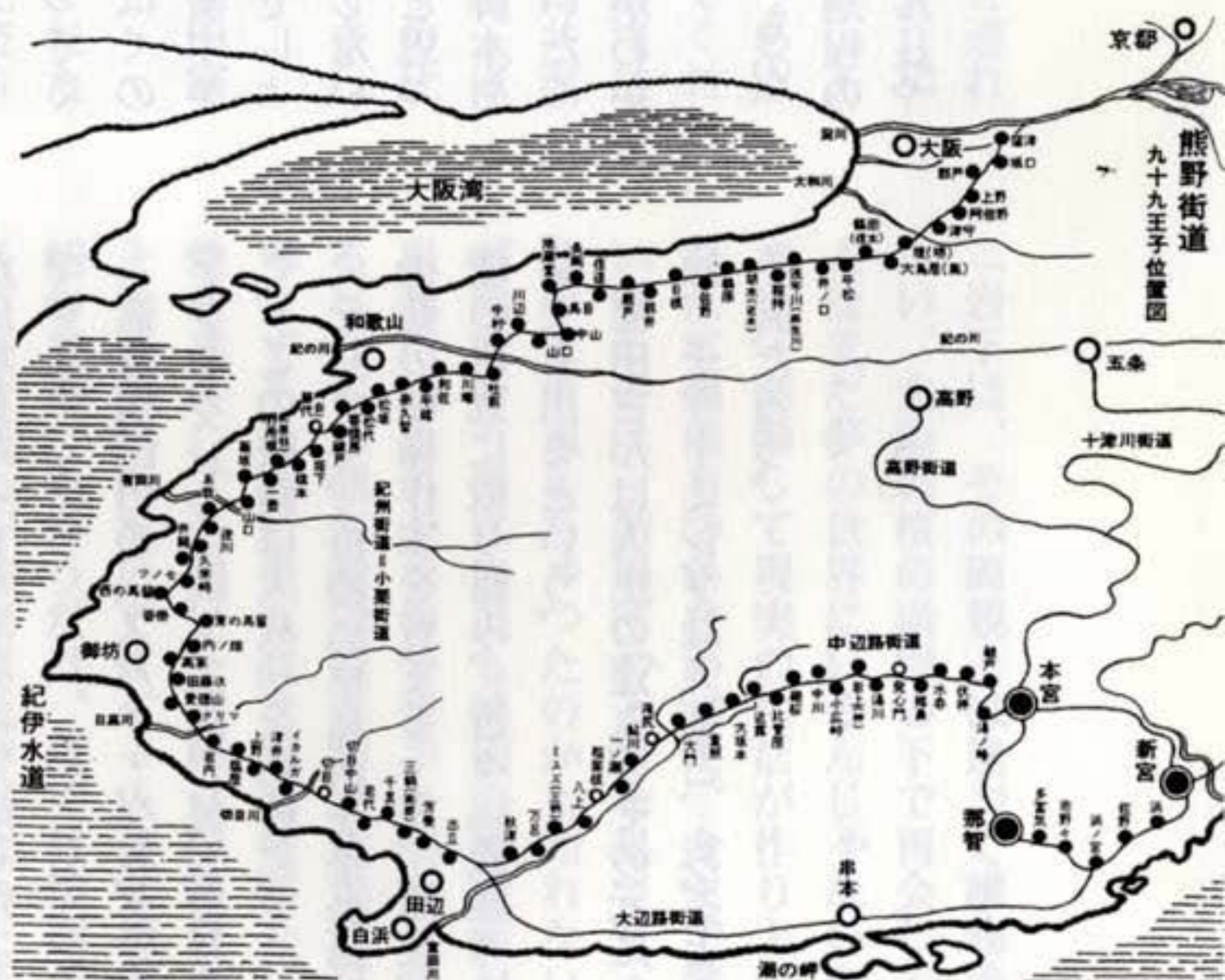
熊野古道 を行く

森清鑑

第三回

橘本王子から湯浅へ

峠からみかん畑を降り、まことに細い路をくねって下ると橘本王子跡に出る。眼下一面にみかん畑が展開し、古道は山間を縫って見



えぬ弧を描いている。晴れ晴れとしたのどかな田園風景。ここが紀州みかんの発祥の地である。徐福が始皇帝の不老長寿の薬として候補に仮定したといわれる、みかんの元祖の地だ。橘とは現代のみかんの原種で、田道間守（たじまもり）が垂仁天皇の時代、不老長寿の薬として持ちかえったのが紀州みかんの始まりという。古道は幾世代に渡って人々の命を支えてきた、言わば日本人の基本食ともいえる、みかん、梅、味噌、醤油、鰯節といった大切な生命源を発祥させてきた。橘本王子は今ではただの小高い丘の上にある民家の傍に石碑となって残っているだけだがその存在意義は大きい。

橘本王子跡から農道を降り、谷沿いの道を行くと、岩屋山福勝寺に辿りつく。長い石段を上り詰めると優美な屋根瓦を頂くお堂がある。その小さな小窓からは多数の阿弥陀像が覗けるようになっていいる。お堂の脇に、巨大な平板の岩盤があり、絹のような瀧が池に滴

り落ちている。雨が降ろうものなら岩全面から無数条の白糸が落ち、景観の見事さは例えようもないという。信仰と神秘の瀧、山におわす神々と仏教信仰、その神仏混合は日本人々の信仰の歴史をそのまま表しているとい

って良いであろう。

丘をさらに降りると川にでる。この辺り一帯からは、宇井、榎本といった氏が発祥している。全国に点在している、この名の源はみなここから伝播したものだ。

紀州徳川の菩提寺、長保寺

ここから我々は、長保寺（ちようほじ）に向かった。辿りついてみるとその広大偉容な山門が、格調高く、そびえている。参道は桜の木々におおわれ、「長保寺」の額が高々と掲げられている。この額も境内にある多宝塔も国宝である。この寺は長保二年、すなわちようど西暦一〇〇〇年にかの紫式部の親方、一条天皇の命で建立された。天皇の年号があ

る寺社は古来最もその格式が高い。多宝塔の建築様式は、二層構造で一層と二層の間は装飾美に彩られた円柱形式になっている。このため、単純にして安定感のある美を現出している。ところで、この寺は、紀州徳川家の菩提寺でもある。家康の十子、頼宣が御三家として紀州を治めてより、平安、室町時代とはまた別の、人々の眺望を仰ぐことになる。

頼宣が当寺を菩提寺と定めた理由は、その地形が天然要害の条件を申し分なく備えていたことによる。彼もまた熊野巡見の帰途、この古刹に立ち寄った。それで紀州徳川家の菩提寺とすることに決めたのである。

多宝塔から背景の山に登っていくと連なる石段の上に歴代紀州藩主の墓が、所狭しとばかりに並んでいる。そのいずれも広い面積を維持し、石柵で囲まれ中央に無縫塔が建てられている。鬱蒼とした木々に囲まれ、「昼なお暗し」の感がある。頼宣の巨大な無縫塔には戒名などが一切刻まれていない。これは侵

略された際に敵に判別つかぬように意図したものだという。用意周到なことだが、彼の時代には天下定まりし、といえども、いつひつくり返されるか油断を許さぬ緊迫感があったということである。彼の苔むした無縫塔を含め、女房、女官の豪勢な墓も今では石と自然の融和した存在となっている。

逆川王子から湯浅、道成寺へ

湯浅という町は

有田市（ありだ）を抜け、吉備町に入る。あたりは峠と田園風景の素朴な景観である。付近はみかん畑が多い。峠のふもとに逆川王子（さかさがわ）がある。小さな社殿が残っている。階段を下り、古道を少し歩くと、逆川に出る。この辺り一帯の川が東から西へ流れているのに対し、この川は西から東に流れているところから、逆川といった。今は小さな川で、コンクリートに固められており、旧日の面影は皆無だが、千年前はとうとうと蛇



◆初代徳川頼宣の無縫塔



◆国宝の多宝塔

行する大きな川であつたに相違ない。川から峠の登りに出る。ちよつと上がると、右手に弘法の井戸がある。弘法の井戸は全国いたるところにあるが、ここも弘法大師が杖を突くと清水が湧出したと伝えられている。井戸垣は残っているが井戸は枯渇している。ここからさらに、坂を登ると左手に後白河上皇の腰掛岩がある。登りきると、糸我峠に出る。頂上から後ろを振り返ると、峠を越え、逆川を渡り、再び登り来る古道の地形が読める。峠の右手眼下には湯浅の町と遠く広がる海が見える。熊野古道は湯浅の町に向かって下りて行く。

湯浅は、今は単なる田舎町風情だが、その歴史的存在は大きい。古来、有数の富裕の町で、慶長年間には、町幅十四丁に及び、民家数は約三千軒に達したという。湯浅には、文化的に三つの大きな足跡がある。ひとつは、金山寺味噌の発祥地でそれまで味噌というものが無かった日本食文化に革命をもたらした。

た。二つ目は味噌製造の過程で醤油（湯浅醤油）を作ったことである。連綿と続く日本人の二大食文化の基礎がここで生れた。三つ目は古来有数の漁業地であり、当時の先端技術たる漁法を編み出し、湯浅の漁民が千葉県御宿付近に移民し、関東に画期的な漁業革命をもたらしたという。それだけに湯浅の歴史的存在感は大きい。熊野古道は町の中心部を抜ける。目抜き通りにある金山寺味噌の老舗から右に入ると、勝楽寺がある。この寺は、十一世紀には三十数棟の社があり、巨大な規模を誇っていた。幸運なことに通常ではかなわぬ重要文化財の阿弥陀如来を拝観することができた。如来様は、十一世紀藤原時代のもので、お顔は目じりが幾分下がり、柔和な微笑を湛えている。そのふくよかなお姿がわが身を包んでくれるようであつた。阿弥陀如来像の右手には、鎌倉時代の地藏菩薩様が鎮座し、半伽座の姿勢で、その左足は今にも立たんとする動きが見とれ、祈る者を救わんとする姿

に映った。増長天、持国天は運慶・快慶の弟子が製作したものらしいが、幾分厳しいお姿だが格調高い。小さな十一面観音は、藤原時代のもので、やさしい顔をなさっている。受けた印象はとても強く、しばし呆然とした。勝楽寺は湯浅氏の菩提寺でもある。裏庭に回ると、紀伊国屋文左衛門の生誕地碑がある。紀文の生誕地は幾つもあるようだが、ここには彼の過去帳があるという。紀文はみかんの大商人の前にすでに資産家であったそう。湯浅は、また鎌倉時代の華嚴宗の高僧、明恵上人の出身地（現在の湯浅山沿いの金屋町）で幾つもの足跡が残されている。

湯浅は、宝永年間に大津波に襲われ、三〇〇人以上の死者を出し、その後、堤防の大工事が行われたが徐々に衰退に向かう。勝楽寺から、少々行くと久米崎王子跡がある。石碑だけである。久米崎王子の左手から古道は広川に沿って上っている。まもなく井関王子だ。そしてここから鹿ヶ瀬峠が始まる。藤原定家

は藤代峠に続いて鹿ヶ瀬峠でも「次にまたシノセの山をよじ登る。崔巍の峻嶒（さんかいのけんそ）」と嘆いている。峠には杳掛王子がある。この古道には約五〇〇メートルの中世の石畳がそっくり残されており、昔の面影を残し、しかも金魚茶屋（旅人を慰めるために金魚を飼っていた）跡や馬頭観音があり、海の眺望がすばらしいという。残念なことに今回は行けなかった。

興国寺縁起

われわれは直接紀伊由良に出た。そして興国寺に立ち寄る。鳥居をくぐると、長い階段が上に向かって伸びている。周囲の風景は格調が高く、この寺の品位を印象付けている。山門をくぐると、広い空間があり、正面は本堂、左手前奥には天狗堂、右手は方丈、天狗堂の前には庫裏、鐘楼と続く。その横に千年杉が屹立している。興国寺の開山は法燈国師。ここにはドラマがある。鎌倉三代将軍源実朝



◆紀伊国屋文左衛門の碑

を葬った寺であり、味噌、醤油、尺八、虚無僧発祥の地であるからだ。実朝が八幡宮で公暁に暗殺された事件を聞いた忠臣葛山五郎景倫は実朝の遺言に従い、彼があこがれていた宋の雁蕩山に分骨すべく由良の港に着いた。そして遺骨の一部を高野山に葬り、菩提を弔った。尼將軍北条政子はこれを知り由良の地を彼に与え寺を建てさせた。これが西方寺（後の興国寺）である。彼は実朝の遺骨の一部をこの寺の境内西に葬り菩提を弔った。すでに老齢を迎えていた葛山は高野山の僧覺心に残りの骨を雁蕩山に葬るよう依頼した。覺心は一二四九年、四十三歳の時、宋に渡り無事遺骨を納める。そして彼は数年留学し、金山寺で味噌の製法を習い、帰国に際して尺八を得意とする四居士を連れて帰る。帰国後、再び葛山から乞われて西方寺を任され、臨済宗興国寺を開山する。この覺心こそ後の大高僧法燈国師である。宋に行く前には高野山で修行し、道元禪師にも師事している。実朝の

墓は本堂の左手にある。覺心が宋から帰国の際に観音様に助けられたことから如意輪観音がこの寺の守神となっている。実朝の史実がここで生きかえるとは思わなかった。それにしても彼が味噌の製法を日本に伝えたのである。法燈国師が連れ帰った居士が後に尺八を伝え、禪の修行に尺八を使うようになった。そして虚無僧の拠点となったのである。臨済の經典にある由来とは次のようなものである。昔、中国にある高僧がいた。彼は鈴を鳴らしながら、謳うように法を説いた。愉快で快活な僧で「いずこより来り、いずこに去る」となどと謎めいた言葉を発して歩く。この僧を崇拝した人が弟子入りを望むが受けつけない。そこでこの人は笛が得意であったので、鈴の代わりに尺八を吹きながら諸国を巡る。したがって、尺八のことを虚鈴という。すなわち、鈴の代わりである。この古事由来は方丈のふすまに墨絵で生き生きと描かれている。虚無僧は興国寺から発祥し、京都山城の

普化宗へと発展した。当初は高貴な存在であったが、次第に忍者の様相を帯び、ついにはやくざのような墮落を見た。そこで明治政府は虚無僧禁止令を出したのである。

禅堂には法燈国師の坐像があるがこれは未公開である。この像は二つに割れ、経典や貴重な所持品が収められている。本殿の天井には鳴き龍が描かれており、手を叩くと響きが返ってくる。禅堂には全国から坐禅の修行者が集まってくる。一畳の布団は、三段に畳まれ、坐禅の座布団になる。そして寝るときにはこれを伸ばしてその場で寝るのである。「起きて半畳。寝て一畳」とはこのことである。

法燈国師が日本に持ちかえった金山寺味噌（圣山寺味噌）の製法は当初は興国寺でしかんに使われたが、国師は一般に伝授し、湯浅に伝え、ここで花開いたわけである。また、味噌の製造過程から醤油が生まれ、これも、あつた湯浅を起源として全国に普及していった。

原木が生い茂り極めて荘厳な興国寺を後にし、階段を降りる。古道に戻り、東光寺に着く。小栗判官伝説で照手姫が小栗を木車に乗せ、ここまで押してきた。そしてここで病を癒そうとする。今では狛師町の外れの山裾に小さく存在しているが、昔の熊野巡礼者にとつては、大切な憩いの場所で、病はここでゆつくりと癒し、再び詣での旅へと出立した。東光寺は薬師如来信仰の寺である。東光とは薬師様の光を意味する。境内にナギの大本が厳然として一本立っている。ナギの木は周囲に粉を撒き、他の木を寄せつけないという。ナギの前には鎌倉時代の墓が三基立っている。狛師町の曲がりくねった、細い道を引き返す。

道から外れ、田園を行くと、川を渡り左手に煉瓦の塀があり、高家（たいえ）王子にでる。今は内原王子神社となっているが立派な社殿である。傍を西川が走っており、「愛子の淵」がある。目が見えなくなった十八才の



◆名園



◆興国寺本堂

息子がここから身投げをする。父親が飛び込んで救う。すると、わが子は観音力で甦るといふ伝説である。今では飛び込もうにも飛び込めそうにない小川だが、昔はとうとうと流れていたであろう。近辺の路傍で黒竹の群生を見つけた。この辺りは黒竹の名産地なのである。高家王子から道成寺までは近い。途中二、三の王子跡があり、一里塚、蛇塚（おそらく清姫伝説）があり古道を偲ばせる。

道成寺とは

かの有名な道成寺に寄る。本堂、三重塔、方丈、講堂などの大伽藍、大きな寺である。大宝元年七〇一年創建という紀州路最古の寺である。寺社名の由来は建設を担当した紀伊の国司、紀道成（みちなり）が工事中に亡くなったため、その名を起源としたという。奈良時代にはすでに大伽藍が存在していた。まず、大宝殿で国宝の木造千手観音を拝観。千手観音の手の数は通常四十二、四十四本であ

る。つまり、一本の手が二十数人分の役目を担っている。堂々たる観音像である。ここには十六体に及ぶ、毘沙門天、帝釈天など国宝・重文の仏像がある。注目したのは、インド二世紀の石像でこの仏陀は完全にヘレニズム文化を象徴し、ギリシャ美人そのものである。道成寺縁起には、宮子姫伝説が絡んでいる。彼女は当地猟師の家の生れで、美しく、聡明に育ったが不思議なことに髪の毛が生えてこない。ある日母親は海底で光り輝く観音様を見つける。そして一生懸命祈願する。するとものの見事な黒髪になる。その黒髪を鳥がくわえて運ぶ。それが都で権勢並ぶものなき藤原不比等の目に留まり黒髪の持ち主を探すことになる。こうして都にのぼった宮子はやがて不比等の養女となり、宮子姫として皇太子の妻になる。夫は文武天皇。彼が宮子姫の望郷の念を慰めるため寺の建設を紀道成に命じたというのがこの寺の縁起である。彼女は後に聖武天皇の母となった。この宮子姫の



◆源実朝の分骨墓

像もある。様々な仏像に感銘し、縁起堂にて絵説き説法を聴く。紙本着色道明寺縁起は重文で大切に保存されているが、コピーの絵巻物を広げ僧侶が立て板に水といった感じで説法する。これがまた実に面白い。皆爆笑しながら聞きほれてしまう。例の安仁・清姫の物語絵巻である。願掛け修行のため熊野詣でしている眉目秀麗なる旅の僧、安仁を見初めた清姫が迫る。安仁は修行のため女色を絶つての旅であるから言い寄る清姫に対し、その場を繕って熊野本宮へと進む。再会の約束の期日が来ても、彼は戻ってこない。清姫が尋ね探すと彼はすでに通りすぎて行ってしまったことが分かる。清姫は彼の後を追う。彼女の怨念は身を蛇に変えてしまう。道成寺に逃げ込んだ安仁は、大きな蛇から逃れるために梵鐘に隠される。清姫蛇は金を取り巻いてついに安仁を焼き殺してしまう。結果が裏目に出た彼女は身を投げて死ぬ。絵本には焼き殺され黒焦げになった、安仁の骨の遺体までリア

ルに描かれている。この物語をくると絵巻物を開きながら世事もろもろのこと、男女のあり方などを説法していくのである。安仁の遺骨は三重塔に納められているという。これが能・歌舞伎で有名な物語である。縁起堂には歴代の歌舞伎役者の写真が飾られている。なにかしらの真実があったとすれば、ある女性が若い僧に迫ったが、願掛け修行を理由に断られる。しかし、彼女は諦めないで執拗につきまといつてついには無理心中に誓いを遂げるというところかもしれない。言わば、ストーリーカーの走りかな。昔は性におおらかだったこと、子供を作ることが大変重要なことであり、旅人と寝ても子供を作ることがあったという。祭りの乱交なども神から子を授かったという意識で受けとめられたこともあったらしい。ところで問題の鐘楼は現在の道成寺には無く、京都に持ち去られているという。いずれにせよこの物語も小栗判官と同様に熊野詣のPRになったようだ。

(つづく)



◆道成寺三重塔

〈著者プロフィール〉
Mori&Associates代表。
環境・廃棄物調査等。その他
海外／国内の広告・マーケティング調査。太極拳講師。

2005

絵と文

村上健

アタマタマリヤ行

古い商店が好きだ。それも、手前どもの店は享保年間から続く老舗でござんして、と胸を張られるのではない。人間だって、若いころ思い描いた通りの人生を歩める人はごくわずか。成り行きで今日まできちゃったという風情の店にこそ、肩入れしたくなるというものです。

信州上田の北国街道沿いで見つけた造り酒屋さんもそんな一つ。週末だというのに、一時間近くスケッチをする間に来客はなく、余計なお世話だが少し心配になってくる。

建物と山並みを描き終え、店を引き立てる人物が欲しいなと思っていたら、ついにやってきました、赤ん坊連れのお母さん。にこやかに話しかける酒屋のおかみの姿にホッとしながら、スケッチも無事修了です。

生きとし生けるものは誰であつても身体を捨てて消えて去る。善人たる者はすべては失われていくものと覚悟して、禁欲の行（梵行）に専らいそしむがよい。

釈尊「ウダーナ五・二抄」試訳

母親がわが子を、しかもいのちに換えても一人の子を護るように、生きとし生けるものに量り知れない慈しみの心を発すがよい。

釈尊「スッタニパータ一四九偈」試訳

＊『ウダーナ』：釈尊や仏弟子、信者たちにまつわるエピソードや教えが集められたパーリ語の仏典。

＊『スッタニパータ』：釈尊の滅後、程なく編纂がされた最古の仏典。歴史上の人物としての釈尊の言葉に最も近いものとされている。

黄昏時のエピソード

四月八日はお釈迦さまの誕生日。喜ばしい日であるけれども、毎年めぐってくる誕生日を、当のお釈迦さま本人はどのような感慨を持って迎えられていただろうか。

紀元前四六三年ごろだったという。お釈迦さまは古代インドの小国カピラヴァストウの王家、釈迦族の王子としてお生まれになった。釈迦族の出身であるから「釈迦」と称され、釈迦族出身の聖者であるから今なお「釈尊」と崇められている。

そのせいか、釈尊の誕生にはいくつかの伝説が付け加えられてきた。たとえば生母マヤー妃の脇の下から誕生したとか、産湯は天から注がれた甘露の水であったとか、生れてすぐに七歩歩んで「天上天下唯我独尊」と宣言したりとか……。

伝説には文化人類学上の解釈もあるのだろうが、その影には見落とされがちな事実もある。仏典では誕生から七日後のことと記すが、マヤー妃が亡くなられてしまったのだ。

難産か、あるいは産後の衛生状態が悪かったのか、ともかく釈尊には自身の

誕生と引き換えに母を亡くしたという事実が残った。

よく人生訓として「生かされている喜び」というフレーズを耳にする。一人で生きているのではない、多くのおかげさまによって生かされている、だから感謝なさいという教えである。

仏教でいえば縁起の教えに当てはまるが、母の死が訴える命のはかなさ、自分のために母が犠牲になったというやるせなさ、それらが釈尊を出家に導いたのだろう。

ところで『ウダーナ』には、あるエピソードが伝えられている。

ある日の黄昏時のこと。弟子の阿難が一人坐禅にふけたのち、やおら釈尊のもとに進み出て腰を下ろした。そして、瞑想中に感得した光景を告げるのであった。「大変驚きました。釈尊の母上は短命ではありましたが、兜率天に生まれ変わっておられました」と。

ただ釈尊にはすでに承知のことだったのだろう。「その通りである」と答えて自ら阿難の言葉を繰り返し、冒頭の教え（前半の偈）を論すのであった。

仏教の出発点は諸行無常にある。無常なるものに執着するから苦しみがある。だから執着しないように「欲望を抱くな、禁欲の行にいそしめ」と説く。しかし、このエピソード。諸行無常を言いたいただけなら、はたしてマリーヤ妃が兜率天に生まれ変わったと強調する必要があったのだろうか。

むしろ、肉体を捨てた後、この世から消え去っていく先に来世の世界があり、その世界を感得するための方策を伝えているのではなからうか。釈尊にとって、阿難が天界に生じたマリーヤ妃を感得できたということは、天界の生母を感得できる仲間が増えたという喜びになったと思えるのだ。

諸行無常の世とはいえ、釈尊は亡き母を忘れ去ろうとしたわけではない。むしろ冒頭『ダンマパダ』のように、命を懸けて我が子を守る母の愛情に慈悲の本質を見定めていた。釈尊が深い瞑想のなかに天界に生じた生母の姿を認めていたのは母の恩を忘れなかった証であろう。小説家なら『ウダーナ』が伝えたエピソードはマリーヤ妃命日のお逮夜、四月十四日夕刻の、しかも晩年の出来事と綴るに違いない。

(浄土宗総合研究所 袖山榮輝)

日本酒のことば

の日本酒

じかん

その六
出合いの酒
別れの盃

国税庁の統計によると、全国には現在、約千五百もの蔵があるそうです。というわけで、日本酒好きにとつては、そんな沢山の蔵の中から、新しい佳酒を探し出す楽しみはことのほかなのですが、それとはまた違うお酒の楽しみもある。その事を私に教えてくれたのは、阪神・淡路大震災まもなくの神戸・三宮で出会った一軒の居酒屋さんでした。じつは神戸は私の故郷で、それを知ったある雑誌の編集長がご好意で、「うちでも神戸の復興支援を何かやりたい。しいては読者が神戸を旅したくなるような良いお店の特集を組もうと思うので行って来て下さい」と。その居酒屋さんに出会ったのは、まさに

その取材で、まだ随所に傷痕を残す神戸の町を歩いていたときのことでした。きっかけは、やはりお酒。今から思うとかなり不思議な縁なのですが、その直前にオーストラリアに取材に行った際、そこで出会った大阪出身のご夫婦が、「日本酒が大好きなら関西に行った際はぜひ大阪の呉春というお酒を飲んでみて下さい」と教えてくれたのです。そして、ふと通りかかった路地で見つけた居酒屋さんの、旧字で『ながや』と書かれた慎ましい看板の横の、いくつかの一升瓶と一緒に並べてあった呉春の瓶。それに惹かれて入ってみると、そのお店はまさに「神戸の宝」とも言えるような素敵な居酒屋



藤原理加

さんだったのです。ご主人は、かつて評判の料理旅館を開いていた方で、「もう年だから」と旅館を閉めてからも、「お父さん」の味を恋しがる旅館時代の常連に応えるため、さらには震災後の神戸の人に少しでも元気をつけてもらえればという思いで、「お母さん」と娘さんとご家族だけで切り盛りする「ながや」を開店し、頑張っておられたのです。明石蛸の天ぷら、鳥の空揚げ、ぬた…、黙々と料理するお父さんの姿をカウンター越しに見ながら頂くお料理は、驚くほど安いのに、何を食べても「年季」という言葉の意味をしみじみ教えられる幸せな味。そして、お父さんが選んだお酒も、やはりそんな

味がしました。いつも笑顔のお母さんがなみなみコップを入れた榊にまで溢れるほど注いでくれる酒は、立山(富山)、梅錦(愛媛)、小鼓(兵庫)…酒の銘柄はその時々で違うけれど、どれも、安いけれど旨くて料理にも合う酒というお父さんの信念が感じられるものばかり。でも、そんな「ながや」も遂に昨年末、大勢の常連から惜しまれつつ店仕舞い。最後の注文を作り終えたお父さんには、心からの感謝を込めた別れの盃を注ぐ手があちこちから伸びました。そのときのお父さんの晴れやかな笑顔。別れはとても寂しいけれど、また一つ、世にも美しいお酒の味と風景を見せてもらった夜でした。

フレンチな しあわせの みつけ方

監督 イヴァン・アタル



2005年4月シネ・アミューズにてロードショー

この映画の中でテレビ放映される「明日に向かって撃て」（原題「ブッチ・キャシディとサンダンス・キッド」）を始め、本邦上映タイトルと原題の内容とにズレのあるケースも珍しくはないが、本作の原題は「二人は結婚し、多くの子宝に恵まれました」、英語版のそれは「そして、みんな、いつまでも幸せに暮らしました」で、いわゆる「めでたし、めでたし」に類するハッピーエンディングの常套語句なのだ。

人を食ったというか、現実ばなれをしたというか、これらの原題にふさわしく、監督イヴァン・アタル自演のサラリーマン、ヴァンサン（妻（これもアタルの実妻！）シャルロット・ゲンズブールが演ずる）ガブリエルは「妻を娶らば才長けて、見目麗しく情けあり」と、虫の良すぎる「歌の文句」そのものの。

「歌」は「友を選ばば」と続くが、選ぶまでもなくジョルジュとフレッドという二人の親友と、休日はサッカーに汗を流し、夜はポーカーの卓を囲む仲で、何となく漂う「悪童時代」の雰囲気、ガブリエル

も、そしてジョルジュの猛妻ナタリーも（或る時は積極的に）共にしてくれる。フレッドは、映画の終わり近く「年貢を納める」までは独身で、引く手あまたのプレイボーイだ。

「悪童時代」の共犯意識に根ざすのが、三人はよくタバコを吸う（山荘のシーンで回し喫みするのは、もつとヤバイものかもしれない）。いや、三人だけではない。登場する大人のほとんどが年齢性別を問わず、優雅にくゆらしたり、或いはイライラ吸い捨てたりする喫煙の千姿万態に見惚れつつ、「たばこ規制条約発効」を錦の御旗に強行されんとする「プロ野球選手の喫煙状況調査」など、常軌を逸していると思えぬ「タバコ狩り」の現況に思いを馳せると、愛煙家および彼らの存在を容認する同志と共に、流石は良識の国フランスと、意を強くせざるを得ない。

もう一種の煙がある。賃貸マンションでジョルジュたちの隣に居を構えている、インド人夫婦の寝室に棚引く線香の煙である。彼らのベッドシーンよりもすさまじいのが彼女の「よがりごえ」で、フラン

スを讃えた舌の根の乾かぬうちで気がひけるが、いまどきの日本に「よがりごえ」が隣室に鳴り響くような賃貸マンションがあるだろうか。

隣室に負けじと猛妻ナタリーが起す「めたけび」？ が、壁の向こうに届かなかったとすれば、フランスの防音工事も完璧だったことになり、寝室の線香は東洋人夫婦の（声を含めた）精力絶倫ぶりへの羨望、もしくは煙に秘められた催淫効果を暗示する小道具だったのかもしれない。

煙のほかにも空中をたゆたう物体があった。かつて「雪ハ鵝毛に似テ飛ビテ散乱ス」と詠じた白楽天に見せたいような、室内くまなく舞い乱れる羽毛たち。夫婦喧嘩の過程において引き裂かれた羽毛布団の内臓であり、取組み合いの発端は前記『明日に向かって撃て』のレッドフォードとニューマンに対する、亭主殿の「理由なき嫉妬」で、二人を追跡するポリヴィア警察隊の馬蹄の響きを伴奏するバート・バカラックの軽快なメロディをBGMに、マンションの四部屋（？）せましと駆け巡るのだが、ロバートもポールもガブリエルの「好み」でないことを観

客たちは既に勘付いており、その「勘」を裏付けるのがエンディング部分のディテールである。

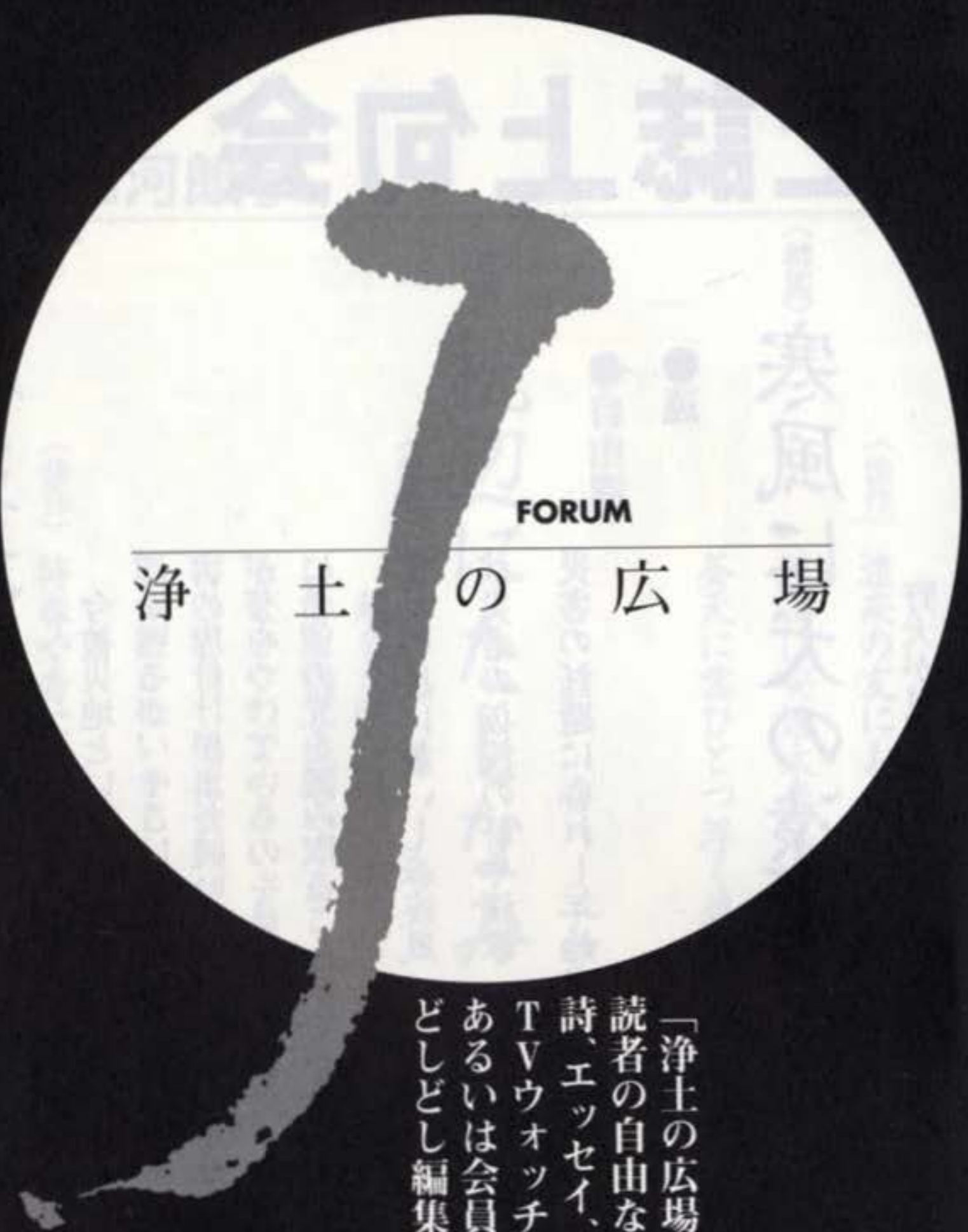
実生活においても「夫」であるアタルの屈折した心境の反映であろうか、この場面がガブリエルの「妄想」にすぎないのか「現実」であるのか「謎」の一字に尽きるが、もう一つの謎はガブリエルの「本命」氏が、役柄の上でも演者としても一貫して「無名」を通すことで、監督・主演「ブレイブ」一作を挙げるだけで「天下に隠れもない」ジョニー・デップと例のインド人夫妻が「キャスト」として紹介されないのは、よもや、良識の国フランスにあるまじき「人種的偏見」のなせるわざではあるまいが……。

いっぽう、ほんの数カットの出番にすぎないのに配役表に名を連ねる面々の中で、カイヤット、ベツケル、そしてルルーシュの演出のもと、少女から熟年に至るまでの知的女性美を演じ尽くしたかに思われた、あのアヌーク・エメから更なる魅力が惹出される。彼女たち老夫婦の挙措動作、末端に行きわたる「静謐なる存在感」こそ、監督としてのアタルに

とって、映像化すべき「本命」だったに違いない。

例によって蛇足を二本。前記寢室の線香と関わりがあるやもしれぬが、江戸時代の遊里では線香で勤務(?)時間を計っていた。「伽羅大観」(直径一・九耗、長サ二十二糎)の持続時間は四十八分。まさに「一日三十本」という『近世風俗志』(岩波文庫)の記述と一致する。『江戸語の辞典』(講談社学術文庫)には「線香の本数を数えるのに一二三と線を用い四は王、五は玉と書き」四時間に相当するが、これこそ現代コンパニオン諸嬢にも通用する「玉代」なる呼称の語源だそう。

さて、文化十三年(一八一六)四月一日から八月十一日まで、信州各地に「応請摂化」の旅を続けられた徳本行者の『日課勸誡聞書』によれば、説誠に先立つ「念仏一会」が「中官香一本唱畢」とある。自坊の「中官香」(幅・厚サ共四・一耗、長サ四十・五糎)と同一規格とすれば、僧俗一体の高唱念仏ピッタリ三時間ののち、勸誡に入れられたことになる。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

● 災

〔特選〕被災地の盆栽の芽に日が動く

石原 新

今被災地というと、どうしても地震を思い浮かべるが、そこは読者に任されている。災害の片付けがまだ続いている所で、ふと盆栽が芽をつけているのを見付けたのだ。下の句に希望の光を読み取ることができる。

〔佳作〕震災の後に襲いし春疾風

金谷 友江

被災者の仮設の軒や桜草

中島富士子

災害の話題に昏れし年始客

佐藤 雅子

● 遠

〔特選〕寒風に犬の遠吠えひとしきり

増田 信子

野犬が見られなくなったから、これは飼いだらう。この頃、人を見ると吠えるというのが少なくなったが、遠くから鳴き声が聞こ

〈特選〉

枕辺にたしなみの櫛寒明くる

北川 弘子

●自由題

〈佳作〉

えてくる。夜だろう。空気が余計にぴんと張りつめたように思えてくる。

片桐てい女

遠山は安達太良山か牡丹鍋

河合富美枝

蒼天に雲ひとつ浮く遠野かな

村松 芳郎

〈佳作〉

起きた時の身だしなみとして、寝る時にはいつも枕元に置いておくのだろうか。誰が見るというのでもない、あるいは家人だけなのにと。男はせいぜい酔い覚めの水くらいしか置かないから、感心してしまう。

西原 天気

空き缶がかつと口開け犬ふぐり

山口 振子

初句会一句成らざるままの時

池田 伊吹



参加作品.....編集部選

災

被災せし友より雪を搔くたより

片桐てい女

息災の追伸細き年賀状

井村 善也

黒々と災の字ゆらぐ京の雪

谷 しげ子

災は谷なりやがて来る春の山待つ

山本美代子

災と書き清水寺の年納

周東 澄江

災厄を払ふがごとく霏々と雪

中島 一子

御飾に災ひ除けの千社札

河合富美枝

雪深し身を寄せ集う被災者の宿

今井 恵子

遠

遠近の風に集うて利休の忌

金谷 友江

風邪に臥すモーツアルトの遠鳴りて

井村 善也

遠き友来て酌みにけり安吾の忌

中島富士子

電飾の灯りし蔵王遠景に

佐藤 雅子

遠景に光織りなす冬の旅

伊藤寿美子

遠縁の娘も二児の母柿送る

山本美代子

遠慮なき友の電話に初笑ひ

周東 澄江

遠近の野から里から除夜の鐘

中島 一子

冬晴れ間遠く山頂白き富士

今井 恵子

自由題

独活の芽の伸びの早きの雨の後

金谷 友江

流水をもて遊ぶ波鳥渡る

増田 信子

てんてまりつけば日溜まり広がりぬ

中島富士子

天職といわれ蒔田に老い晒す

石原 新

華やぎし成人式に孫もあり

佐藤 雅子

涅槃会や干支七巡の易からず

片桐てい女

今日の天気見定めぬうち雪時雨

山本美代子

年詰る肩の痛みのいや増せり

周東 澄江

逆手でも金釘流も書き始め

中島 一子

木魚を打ちて行列燃灯祭

安達 良昭

若菜野にオカリナの風透きとほる

河合富美枝

初詣神楽遙か人の列

今井 恵子

紅梅や坂の途中の精米所

山口 東人

寒蜩電球ピシりと切れる宵

山本 勝之

味の素ことりと置いて冴え返る

西原 天気

浄土誌上句会のお知らせ

題

③季語ではありません

菜境自由題

締切・二〇〇五年四月二十日

発表・『浄土』二〇〇五年六月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下

さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内

月刊『浄土』誌上句会係

さっちゃんねネッ

19 かい目

かまちのろう



編集後記

巡る春凡夫の自覚もないままに 岱潤

先月は世界一の億万長者といわれた人や、国会議員が強制わいせつで逮捕されるなど、予想できないことが起きた。そして私も生まれて初めて刑務所の中に入った。と言っても私の場合は保護司の研修会だが。やはりあの六メートルの塀の中に入り、出入り口の鍵が閉まるときは、何かオオツという気持ちになる。

私の訪問した横浜刑務所は今では閑静な住宅街にあり、外見からは塀も見えず、刑務所のあの雰囲気は全く感じられない。現在一五〇〇名弱の受刑者があり、定員を遥かに超えている。六〇歳を超える人が二〇％近く、外国人が二四六名もいるとのこと、また身体・精神障害の者

も多く就労できない者も多いという。そして驚くべきことに、受刑者の平均出戻り回数が五回とのことだった。実に多くの者が再犯を繰り返して戻ってくる。

己を省みたり、反省する場や時間はあるのかとの問いに、警務員は「刑務所は教育の場ではない、あくまでも刑を執行する場、刑とはつまり強制労働である」と、話してくれた。行き場のない人々、失うものが何もない人々はむしろ刑務所を安住の場としているようだ。

社会的身分のある者の逮捕は「人は信頼を築くのに一〇年かかるが、その信頼を失うのに一〇秒とからない」という言葉を思い出したが、現在の刑務所の中ではそれすら感じ取ることができなかった。(長)

雑誌「浄土」

特別会員、維持会員の方々
今月より賛助会員の方々も
記させていただきます

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
江口定信(浦安・大蓮寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
大田秀三(大本山清浄華院)
北山大超(焼津・光心寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮真(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村真道(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
真野龍海(芝・天光院)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkkan-jodo.info>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

編集顧問

大室了皓

浄土

七十一巻四月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷

平成十七年 三月二十日

発行

平成十七年 四月一日

発行人

真野龍海

編集人

佐藤良純

印刷所

株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四 明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三三)五七八 六九四七

FAX 〇三(三三三)五七八 七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

山本正明の
四季の和菓子

春の茶趣

さくらの菓子『花衣』



春は花、花といえは桜。桜ほど日本人に溶け込んだ花はなく、ほかの花と違った趣を見せている。

芭蕉の『さまざまの事思い出す桜かな』のように、人の世の哀歓を表わしている花なのかもしれない。

また、法然上人の御忌も、桜の季節四月に行なわれます。

この桜の花を食するという粋な菓子を、山本氏に創作していただきました。

桜湯の桜の花びらを一枚一枚摘み、水・グラニュー糖・白ワイン・ゼラチンで人肌に温め、梅酒を加えてから冷やしたゼリーの銘は『花衣』。

やまもと まさあき 「と、や魚新」店長。昭和二十八年東京生まれ。京都「たん熊」ほかで修業の後、昭和五十六年東京赤坂の「と、や魚新」開店とともに店長となる。“喰切おまかせ料理”を看板に、一客一亭のもてなしをめざす。



法然上人鑽仰会の

本



『念仏讀本』完全復刻版
1,600円



『差出人は法然さん』
600円



月刊「浄土」
バックナンバー

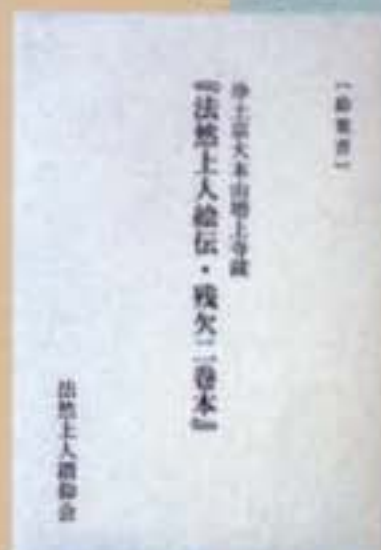
※額装寸法 47 × 59 cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット) 800円



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円



「ブッダ
知れば知るほど」
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊「浄土」を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会
電話 / 03-3578-6947
FAX / 03-3578-7036